

人間の建設 岡潔・小林秀雄対談

「人間の建設」は四十五年前の小林秀雄と岡潔の対談です。ずいぶん探しましたが、廃刊になっていました。

今年の三月に出版されたのを新聞で見ても、マゾンで直ぐに購入しました。送料無料のキヤンペーン中で¥三百八十円（税別）。気の毒な気がします。この対談は決して古くない。というより新しい。テーマは現在も少しも変わらない重要なものばかりです。そして内容は深い。

冒頭で小林氏が「大文字の山焼きが見えるそうです」と言う。岡氏「ああいう人工的なものにはあまり興味がありません」と返す。互いを認めながら真剣勝負です。一筋縄ではいかない対談です。ゆっくりと読んでいきます。発売早々三刷を重ねています。

○ 学問を楽しむ

岡 学問を好むという意味が、いまの小中高等学校の先生にはわからないのですね。好きになるように教えなくてはいけないといつても、どうゆうことかわからないのですね。

小林 つまりやさしいことはつまらぬ、むずかしいことが面白いということがだれにでもあります。

【私】ノーベル賞の先生方の顔を思い浮かべました。みんな学問が面白くて仕方がないというお顔ですね。点を取るために勉強し、点を取るために教える。これを改めるのは今の教育に急務だと思います。

○ 無明ということ

小林 ピカソという人は、仏教のほうでいう無明を描く達人であるということをお書きに

なっていましたね。

岡 その自己中心的な広い意味の行為をしよ
うとする本能を無明という。

小林 今の絵かきは自分を主張して、ものを
かくことをしないから、それが不愉快なんだ
なあ。

岡 そうなんですよ。芸術はくたびれをなお
すもので、くたびれさすものではないのです。
坂本繁二郎の絵についての話もあります。芸
術と芸術家の心について語っていると思いま
す。確かにピカソの絵は長時間眺めていたら
くたびれますね。

対談は相手を言いくるめるのではなく淡々と
進みます。相手のことを知りたいという気持
ちが強いのだと思います。

○ 酒

岡 ものを生かすということを忘れて、自分
がつくりだそうというほうだけをやりだした
のですね。

【私】私は昔の酒はからかったように思いま

す。

2

○数学も個性を失う

岡 世界の知力が低下すると暗黒時代になる。
物のほんとうのよさが分からなくなる。

【私】難解です。でも、キーワードはわかります。個性と言葉でしょう。小林秀雄の言葉についての思索がこの後語られます。

友人と岡先生を訪れた時、数学は考える時間さえあれば他に何もなくてもできると言っておられました。数学も芸術も一人一人の人間と深く関わっているということだと思えます。二人は初対面でお互いを知りました。だから何も隠すものもなく、十年の知己のように自由に話せるのだと思います。もともとそういう人だったのかもしれませんが。いや、何か垣根を超えればそうなるのかもしれない

ん。この対談はとてつもないものです。百回読む価値のあるものです。二人が言っていることは端々は難解でも、中心は一つです。人間だと思っています。

○科学的知性の限界

小林 私が音楽について書くときには、それを言葉にしましょう。バッハの世界はこうであらうとか、言葉でそれをあらわしますね。

最後には言葉するわけです。

岡 言葉に直すのに、いかに苦心を払っていただけるかというがわかります。その苦心を私は情熱といっているのです。

小林 けつきよくベルグソンの考えていた時間は、ぼくたちが生きる時間なんです。自分が生きてわかる時間です。そういうものがほんとうの時間だとあの人は考えていたわけですね。

岡 感情ぬきでは、学問はといえども成立しない。

小林 あなたのおっしゃる感情という言葉は、普通いう感情とは違いますね。

岡 だいぶ広いです。心というようなものです。知でなく意ではない。

小林 ぼくらがもっている心はそれなんですよ。

岡 その感情の満足、不満足を直感といっているのです。それなしに情熱はもてないでしょう。人というのはそういう構造をもっている。

小林 そうすると、つまり心というものは私らがこうやってしゃべっている言葉のもとですな。

【私】言葉、情熱、時間、感情、直感。確かに難しいが一人が生きるとは何かを語っているように私は思います。一言一言に含蓄があります。これは一回ではとうていわからない。わかったとき、自分はどう生きるべきがみえてくると思います。余談ですが、二人の

対話を写していると、日本語の書き方の勉強になります。対談を日本語に直した人のひらがなの美しさが難解な対談をほっとさせています。

3

○人間と人生への無知

岡 今の人類文化というものは、一口に言えば内容は生存競争だと思います。

【私】四十五年経っても全く変わっていないと思います。いや、もっとひどくなった。

岡 時には未来というものがある。その未来には、希望をもつこともできる。しかし不安も感じざるをえない。まことに不思議なものである。そういう未来が、これも不思議ですが、突如として現在に変わる。現在に変わり、さらに記憶に変わって過去になる。これが時

ですね。時あるがゆえに生きているというだけではなく、時というものがあるから、生きるという言葉の内容を説明することができません。ですが、時というものがなかったら、生きているとはどういうことか、説明できません。時というものがなぜあるのか、どこから来るのか、ということは、まことに不思議で強いて分類すれば、時間は情緒に近いのです。

【私】読み落としがなければ、はじめて情緒という言葉が現れます。

岡 デカルトの「考えるゆえにわれあり」というのも、本当に自分が不思議な存在だと感じたのだろーと思います。

小林 私の読んだ限り、それはそう思われま
す。

岡 その実感を忘れて、現在ではその言葉だけをいっている。

【私】私も自分の存在がとても不思議だと思います。なにゆえ自分なのか？ どれが自分なのか？ 確かに小林先生のいつておられるようにアウグスチヌスの引用のように、「時というものを説明しろといったら俺は知らないという、説明しなくてもいいというなら、俺は知っている」岡先生はそれを受けて「そうですね、かなり深く自分というものを掘り下げておりますね。時というものは、生きるという言葉の内容のほとんどを説明しているのですね」と返しています。

4

○破壊だけの自然科学

岡 たたとえば人類の生命を細菌から守るといふようなことでしよう。しかし実際には破壊によって病原菌を死滅させるのであって、建設しているのではない。

【私】四十五年前の自然科学からかけ離れて発達したのは分子生物学だと思います。それ以外はたいした発達はないように思います。高血圧（わたし）さえ上手に治療できないのです。やはり、現在も破壊し続けているのです。

岡　つまり今の科学文明などというのは、ほとんどが借り物ですね。人は自然を科学するやり方を覚えたのだから、その方法によってはじめて人の心というものを科学しなければいけなかった。それはおもしろいことだろうと思います。

○アインシュタインという人間

小林　アインシュタインの言葉として、「わたしは世の中で一番わからないことは、世の中がわかることである。その意味はね、ぼくはこうだと思うのです。欠陥のない幾何学的

現象を書いたわけですね。これはわかるという事です。どうしてわかるのだろうということが、彼には一番わからぬことだという意味ですよ。ベルグソンの議論に対して、どうしてああ冷淡だったか、俺には哲学者の時間はわからぬ、彼がこたえているのはそれだけです。アインシュタインがボルンに宛てた手紙でこういうことをいっている。波动力学が流行したときに、おれはいやだ、いやだけれども、おれにはこれに対抗する理論は一つもない、あるのはおれの指だけだ、皮膚の中に深く食い込んでいる意見を証言している弱い指しかない。

岡　アインシュタインのいうとおり、刃向かおうとしても、指しかないから黙っている。小林　指を守るか、指を捨てて新しいことを発明するか、ということになっておるわけですね。

【私】難解ですね。でも、ぼんやりとわかる

ような気がします。

小林 わたしは哲学者の全集を読んだのはベルグソンだけです。後は何とかかんとか言っておりますが、拾い読みみたいなものです。

【私】謙虚ですね。

小林 わたしは発明者本人の書いた文章ばかり読むことにしました。

岡 どうして解説書という妙なものが書けるか不思議なくらいです。

今も解説書が全盛ですね。

岡 釈尊は諸法無我と言いました。科学は無我である。我をもっているものではないということを教え込まないといかんわけです。

これはよくわかります。すかたんにわかつているのかもしれませんが。

小林 ベルグソンが若い頃にこういうことを言っています。問題を出すということが一番大

事なことだ。問題をうまく出せばすなわちそれが答だと。

岡 問題を出さないで答だけを出そうというは不可能ですね。

【私】今の教育の問題点がここにあるのではないでしようか。余談ですが言葉を書き写すのはとても勉強になります。たとえば「言う」と「いう」の使い分け。「事」と「こと」の使い分け。「殆ど」よりひらがなの「ほとんど」のほうが美しいですね。ワープロだから漢字をつかいすぎ。

5

○美的感動について

岡 情緒を形に現すという働きが大自然にはあるらしい。文化はその現れである。数学もその一つにつながっているのです。その同じやり方で文章を書いておるのです。そうす

ると情緒が自然に形に現れる。つまり形に現れるものを情緒と呼んでいるわけです。そういうことを経験で知ったのですが、いったん形にかきますと、もうそのことへの情緒はなくなっている。形だけが残ります。

小林 詩にしても、昔はずいぶん受け身でしたよ。向こうに詩がある。絵でも何でもそうですが、こちらは敏感だから、向こうから一生懸命に貰うのです。吸収する。そして感動したものです。それがこの頃では逆になりました。私のほうからいろいろ想像を働かすのだな。

【私】情緒という言葉は結構使いますが、それはなにと聞かれれば答えに困ります。辞書的には「折にふれて起こるさまさまの感情。情思。また、そのような感情を誘い起こす気分」ということでしょう。岡先生のいう情緒はもう少し深い。全人間的なものだと思います。だから形にするとなくなってしまう。

小林先生の芸術に向かい合う姿勢は勉強になります。感心ばかりしていないで、私も想像を働かせなくちゃ。

小林先生が知人の骨董屋の俳句の話をした後、小林　しかし名句というものは、そのところに、芭蕉に付き合った人だけにわかる何か微妙なものがあるのじゃないかと私は思うのです。

【私】私はの母も下手の横好きで俳句を作っていました。が、下手だなあと思いながらも、微妙な心の動きはわかった気がします。

岡　そうですね。原画であろうとなかろうと、動機なしに感動するということとはできない。ともかくなにもないのに感動せよと言ってもできませんから、むつかしいものですね。必ずはずつきりとした物があつて感動する。

【私】の頃感動することがめっきり減った。
反省。

6

○人間の生きかた

小林 私はいま「本居宣長」を書いていますが、あなたのおっしゃる情緒という言葉から、宣長の『もののあわれ』の説を連想するのですが。これはやはり情緒が基だという説なんです。

小林 わからんでしような。わかれば書きませんね。

岡 そうでなければ、読む人は企みに踊らされているような気がするでしょう。

小林 方向だけは決まりますが、やれるかどうかはわかりませんね。

岡 きっと本当のやり方はそうなると思います。

【私】対談のテープをおこした人はすごいと思います。読むと会話が聞こえてくるようです。そして書き写すのもとても気持ちがいいのです。茂木健一郎さんが音読が気持ちいいと言っておられるのも共通していると思います。私は校正に読み上げソフトを使っていますが、ほとんど間違いなく読み上げてくれます。これも関係していると思います。

小林 私は人というものがわからないとつまらないのです。だれの文章を読んでいても、その人がわかると、たとえばまらない文章でもおもしろくなります。

【私】実際一人の人というのは不思議なものです。

岡 トルストイは端まで一目で見渡される町に似ている。一目でわかるものを歩いてみる気はしない。

小林　そういうことはありません。トルストイも偉いです。

二人のトルストイの評価が対立します。そうすれば評価するほうの意見に耳を傾けます。

岡　数学は必ず発見の前に一度行き詰まるのです。行き詰まるから発見するのです。

【私】私はいつも行き詰まりっぱなし。

7

○無明の達人

【私】話題の中心となるドストエフスキーの「白痴」が未読なのでわからない部分がほとんどでした。ただ、無明の達人としてピカソが話題になっていました。「白痴」は黒澤明の映画で観ました。

小林　たとえばピカソが無明の達人ならば、
無明に迷わされないと無明をあれだけ書けな
いですよ。無明の中に入らないと、あれだけ
知ることができない。そういう意味でドスト
エフスキーは無明の達人です。

岡　ムイシキン公爵は悪人ですか。

小林　悪人という言葉が悪いが、まったく無
力な善人です。

小林　小説をよく読みますと、ムイシキンと
いう男はラゴージンの共犯者です。ナスター
シヤを二人で殺す、というふうにドストエフ
スキーは書いています。それをムイシキン自
信知らないのです。夢にも思っていない。

【私】無垢が共犯。何となくわかるような気
がします。

○「一（いち）」という観念

【私】私にはこの章が一番おもしろかった。
まず観念という言葉である。近頃お気に入り
バーに追加したコトバンクで調べてみました。
3の解釈が近いと思います。

<http://kotobank.jp/>

3 哲学で、人間が意識の対象についてもつ、
主観的な像。表象。心理学的には、具体的な
ものがなくても、それについて心に残る印象。

岡 「一」を仮定して、「一」というものを
定義しない。「一」は何であるかという問題
は取り扱わない。あるかないのか、わからな
い。

小林 子供が一というのを知るのはいつとか
と書いておられましたね。

岡 自然数の一を知るのは大体一八ヵ月と言
ってよいと思います。それまで無意味に笑っ
ていたのが、それを境にしてニコニコ笑うよ

うになる。

岡　私がいま立ち上がりますね。そうすると全身四百幾らかの筋肉がとっさに統一的に働くのです。そういうのが一というものです。一つのまとまった全体という意味になりますね。だから一の中でやっているのかと言われる意味は意味はよくわかります。一の中に全体があると見ています。

【私】これはいままで気づかなかった観念です。少し自分というものがわかった気がします。気づかずに一のなかでなにこともやっている。

岡　そして時間というものがわかりそうになるのが大体生後三十二ヵ月すぎからあとです。そうすると、赤ん坊にはまだ時間というものはない。だから、そうして抱かれている有様は、自他の別はなく、時間というものがないから、これが本当ののどかというものだ。

それを仏教で言いますと、涅槃というものになるのですね。

岡のどこかというものは、これが平和の内容だと思います。自他の別なく、時間の観念がない状態でしょう。それが何かというと情緒なのです。

9

○数学と詩の相似

小林 岡さんのお考えは、理論とは言えない。一つのヴィジョンですね。私は大変おもしろいと思います。

【私】ヴィジョン vision（英）ここでは、想像力、洞察力によつて思い描かれた像、イメージの意。との注釈がついています。これも読解を助けます。この本の一つの魅力になっっています。

小林 岡さんの文章は確信だけが書いてある
のですよ。

岡 確信しない間は複雑で書けない。

【私】 1 Q 8 4 b o o k 1 を読み返しながら、
「アフターダーク」以降村上作品は少し変わったような気がします。地下鉄サリン事件にこちらがハラハラするほどコミットメント（責任をもって関わること）していた。近年の卵の比喻もその延長上にあると思います。そして、1 Q 8 4 は確信だけが書いてあるように私は思うのです。イメージについても、流れるイメージではなく確信したイメージだけが書いてある。すなわち「確信しない間は複雑で書けない」。こういうかたちで村上学が社会とコミットメントしていることが強く感じられる作品です。

岡 無いところへはじめて論文を書くのを認める。だから木にたとえると、種から杉を育

てることになって、杉からとった材木を組み合わせてものをつくるということをやります。

小林　そうですか。そうすると詩に似ていますな。

岡　言葉が五十音に基づいてあるとすれば、それに相当するものは数ですね。それからつくられたものが言葉ですね。

小林　新しい数をつくっていくわけですね。

岡　数というものがあるから、数学のことばというものがつくれるわけですね。

【私】確かに今は「杉からとった材木を組み合わせてものをつくる」ようなことばかりやっているように思います。

この章は思索する人々にとって今までの方向を変えるぐらい重要な要素を含んでいると思います。私も、確信したことを書こう。

「材木を組み合わせてものをつくる」ようなことはしないでおこう。

○はじめに言葉

岡 自分には書いておかないと、何を考えたのかわからなくなるようなものです。やはり次々書いていかないと考え進むということできません。

小林 そうするとやはり言葉が基ですね。

岡 言葉なんです。思索は言葉なんです。言語中枢なしに思索ということはできないでしょう。

小林 着想というものはやはり言葉ですか。

岡 ええ。方程式が最初に浮かぶことは決してありません。方程式を立てておくと、頭がそのように動いて言葉が出てくるのでは決してありません。ところどころ文字を使うように方程式を使うだけです。

小林 考えるというより言葉を探していると言った方がいいのです。ある言葉がヒョット

浮かぶでしょう。そうすると言葉には力がありまして、それがまた言葉を生むのです。私はイデイがあつて、イデイに合う言葉を拾うわけではないのです。ヒョツと言葉が出てきて、その言葉が子供を生むんです。そうすると文章になつていく。

【私】この章はよくわかります。不肖私もそういうふうに書いています。そのようにしか書けないのです。創作だけではなく今書いている文章もそうです。イデイ（仏） 考え、着想、観念などの意。（注釈より）。

1 1

○近代数学と情緒

岡 仏教に光明主義というのがありますが、それは中心に如来があつて自分があるというのがはじまりで、私はそれが本当だろうと思つています。しかし全知全能なものは無知

無能な者に、知においても意においても関心を持たない。情において関心を持っているのです。情が納得して、なるほどそうだとその人自身が動き出さなければ、前頭葉も働かない。

【私】昔習った数学を思い出しました。でもこの整然とした解説は見事です。昔、このような授業を受けていれば数学に興味を持ったかもしれません。学問として数学も、数学者の感情の満足があつた。感情という情が満足しなければ数学は成り立たないということでしょう。だからコンピューターに数学はできないと思います。高校で公文という先生に数学を習ったことがあります。小学生に微積分を教えていると言っていました。数学が解答を得る手段かもしれませんが、今も疑問に思います。公文先生は後に公文式を始める創始者です。

○記憶がよみがえる

小林 言葉が発生する原始状態は、誰の心のなかにも、どんな文明人の精神のなかにも持続している。そこに立ちかえることを芭蕉は不易と呼んだのではないかと思います。

記憶を背負って生きなければならない人の心の構造自体からきているように思えるのです。原始的時代がぼくの記憶のなかにあるのです。歴史の本の中にはなく、ぼく自身がもっているのです。そこに帰る。もういっぺんそこにつかないと、電気がつかないことがある。そうすると脳というものは、たとえばオーケストラのタクトみたいなものだということがわかってくるのです。記憶というオーケストラは鳴っているのですが、タクトは細胞が振るのです。脳がつかさどるものはただの運動です。

【私】脳と記憶の關係に新しい一石が投じられます。脳が全ての精神の座だと信じていた私は驚きました。不易がそうなら、流行はどのようなことか訊いてみたい気がします。

ふえき - りゅうこう 「 - リウカウ」【不易流行】

蕉風俳諧の理念の一。新しみを求めて変化していく流行性が実は俳諧の不易の本質であり、不易と流行とは根元において結合すべきであるとするもの。(kotobanku.jpより)

<http://kotobank.jp/>

1 3

【私】左のような会話があります。

小林 岡さんの文章は確信だけが書いてあるのですよ。

岡 確信しない間は複雑で書けない。

【私】青梅雨も確信だけが書いてあると思います。小説の裏に明確な作者がいます。

○批評の極意

岡 神風のごとく死ねることだと思っています。あれができる民族でなければなりません。世界の滅亡を防ぎとめることができないとまで思うのです。あれは小我を去ればできる。小我を自分だと思っている限り決してできない。

小林 あなた、そんなに日本主義ですか。

岡 純粹の日本人です。

【私】このかけ合いはおもしろいですね。小林先生は少しあきれているように思われます。

小林 特攻隊というと、批評家は大変観念的に批評しますね。悪い政治の犠牲者という公式を使って。特攻隊で飛び立ったときの青年の心持ちになってみるという想像力は省略するのです。その人の身になってみるというの

が、実は評論の極意ですがね。

岡 極意というのは簡単なことですな。

岡 私は数え年五つの時から中学々年生の時に祖父が死ぬまで、他を先にして自分を後にせよというただ一つの戒律、祖父から厳重に守らされたのです。

岡 死をみることに帰するというのは、なつかしいから帰るという意味です。

【私】評論の極意については「小林秀雄の想像力」という題で、無私の精神の本の帯に大江健三郎が書いています。さて探したがなかなか見つからない。小さな書棚にふっと隠れてしまいます。やっと見つかったら本文のどこにあったか見つからない。なかったのかもしれません。はじめて読んだときは、なるほどと深く感銘したものです。今もそれができている人は希だと思えます。知識や理論を先にして、最も大切なことを忘れていきます。次に青梅雨・永井龍男著の話題になります。小

説ですが、評論の極意が登場人物に活写されている小説だと思えます。

岡　うかがっただけでも、感心しました。そういう小説があるのですか。

小林　ええ、こういう小説は、たしかに西洋人にはわかりにくい。これを死をみることに帰するがごとしというのでしうか。

14

○素読教育の必要と総論

【私】素読（書物の意味や内容を考えず、ひたすらその文字を音読すること　注釈より）と音読とは少し意味合いか違いますが、声に出すということでは共通です。茂木さんが云っている音読もこれに通じます。私が今回試しみた書き写しも同じだと思います。織田作之助が書き写しをしていたとどこかで読んだ

ことがあります。意味が直接入ってくるそんな気がします。源氏物語もそうして伝えられたのでしよう。とても楽しいことです。

当然誤読の可能性はあります。それは音読でも素読でも黙読でも同じです。誤読の可能性はどんな読み方でもあるのです。書かれたものの内側に必ず作者の人間があるという信念は、読書の裏に読者という人間があるのも当然です。

岡潔・小林秀雄対談を通読して、個人を越えたところに真の個人があるといっているように私には思えます。そこが出发点でそこが到達点であると云っているように思えてならないのです。でも西洋の個人主義とは異なります。他を先にして自分を後にせよというただ一つの戒律だと思っています。

この読書ノートはなんども書き直されるものでしょう。いくら書き直しても永遠に完成はできない。誰にも。そんな気がします。最後に岡先生の含蓄のある言葉で締めくくります。

「理性はまったく純粋な意味で知らないものを知ることとはできない。つまり理性の中を泳いでいる魚は、自分が泳いでいるということがわからない。」

○人間の建設「ー」岡潔・小林秀雄対談をUPしました。本を読むときの参考にして下さい。それと是非「人間の建設」をご一読下さい。

もし見られないなら[アクトバットリーダーの最新版](#)をダウンロードしてください。75%表示が見やすいと思います。